

# 地域密着型サービス事業者 自己評価表

( 認知症対応型共同生活介護事業所 ・ 小規模多機能型居宅介護事業所 )

事業者名	グループホーム アウル登別館 海ユニット	評価実施年月日	平成21年2月6日
評価実施構成員氏名	石川 哲也 川人 純 宮崎 杉子 伊岐見 順子 深瀬 奈都美 近井 絵梨 仲 弘美 竹内 留美		
記録者氏名	川人 純	記録年月日	平成21年2月6日

北 海 道

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んでい きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営			
1. 理念と共有			
1	<p>○地域密着型サービスとしての理念</p> <p>地域の中でその人らしく暮らしていくことを支えていくサービスとして、事業所独自の理念を作り上げている。</p> <p>ホーム開設時に全スタッフ参加のもとで検討及び作成を行い、今日のケアに繋がっている。</p>	○	<p>ユニット会議や日常会話等を通じ、開設時以降に入社したスタッフに対しても、随時理念の内容や、その本質等について十分に説明を行い、全スタッフが理念の下、日々のケアの中で実践できるよう努めている。また今後は新たな理念の構築やスタッフ個人単位での理念の設定等についても検討していく。</p>
2	<p>○理念の共有と日々の取り組み</p> <p>管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる。</p> <p>スタッフ間での日常会話や、定期的に行っているユニット会議や全体会議等を通じ、理念の実践に向けたケアの見直しや検討等を行い、積極的に取り組んでいる。</p>	○	<p>原点に立ち返り、理念をどのように個人が受け止めるのかを管理者は考えていく必要がある。形だけの理念にとどまらないように管理者が理念を体現できるようにしていく。</p>
3	<p>○家族や地域への理念の浸透</p> <p>事業所は、利用者が地域の中で暮らし続けることを大切にしたい理念を、家族や地域の人々に理解してもらえるよう取り組んでいる。</p> <p>家族に対しては面会時や電話連絡時等、日常的に理念を含めた日々のケアについての説明や意見交換を行っている。また、地域住民に対しては家族会の参加等を通じて、まずは身近に感じて頂けるよう交流場面作りや働きかけの工夫を行っている。</p>	○	<p>本年度開催の夏の家族会においては、より多くの地域の方々に気軽にお立ち寄り頂けるよう駐車場内にカキ氷の屋台を出店を開き無料提供を行い、以前にも増して多数の方々にお越し頂けた為、今後は家族会に留まらず、日常的な触れ合いの場を設けていく。</p>
2. 地域との支えあい			
4	<p>○隣近所とのつきあい</p> <p>管理者や職員は、隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらえるような日常的なつきあいができるように努めている。</p> <p>挨拶等、日常的なコミュニケーションは積極的に図っているが、訪問等の機会は、あまりみられない。</p>	○	<p>夏の家族会以降、駐車場を活用し、入居者と一緒に駐車スペースでのくつろぎの時間を展開し、通りを歩く地域の方々にはいつも以上に気さくに声を掛けて頂く等、自然な触れ合いの場面が多くみられた。また、近隣の子供達が遊びに来る機会も増え、徐々にではあるが、交流に変化がみられている。</p>
5	<p>○地域とのつきあい</p> <p>事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている。</p> <p>町内会に所属しており、定期的に行われている町内会の活動(婦人会や催し物等)や総会等に積極的に参加している。また運営推進会議を通じて意見の交換も行っている。</p>	○	<p>今後は町内会の各役員の方々との意見交換の場を設け、相互理解、地域への積極的な参画体制の充実にに向けた話し合いを行っていく。また町内会で行われている収穫祭等の地域行事に入居者と一緒に参加するなど、引き続き積極的な取り組みを行っていく。</p>
6	<p>○事業者の力を活かした地域貢献</p> <p>利用者への支援を基盤に、事業所や職員の状況や力に応じて、地域の高齢者等の暮らしに役立つことがないか話し合い、取り組んでいる。</p> <p>定期的にホーム代表が認知症に関する講演会を行う等、地域貢献に向けた取り組みを行っている。また運営推進会議を通じ、地域の実情を確認する等のリサーチも積極的に行っている。</p>	○	<p>認知症サポーターの研修を受けたスタッフが、地域包括支援センターと連携を図り、認知症サポーター養成講座の講師として各方面で講座を展開していく予定である。</p>

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んでい きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
3. 理念を実践するための制度の理解と活用			
7	<p>○評価の意義の理解と活用</p> <p>運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる。</p> <p>ユニット会議や全体会議、日常的な話し合いを通じ、全スタッフが理解に努め改善に向けて取り組んでいる。</p>		
8	<p>○運営推進会議を活かした取り組み</p> <p>運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。</p> <p>年5～6回の家族会や避難訓練に併せて運営推進会議を開催し、各メンバーより意見、感想等を頂き、サービス向上及び拡大に向けた取り組みを行っている。</p>	○	<p>今後は、より幅広い視点での意見や感想を求め、運営推進会議メンバーの増員等も検討していく。ノロウイルスの発生を受けて医療面での有識者（訪問診療に来ていただいている医師及び看護師、または訪問看護ステーションの看護師等）や防災面から消防署の職員、緊急時に必要なSOSネットワーク作りの協力体制の確保のために警察の方などに協力を依頼していく。</p>
9	<p>○市町村との連携</p> <p>事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会を作り、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる。</p> <p>これまではホーム代表、管理者、事務員のみが市町村への申請等の手続きを行ってきたが、平成20年2月より担当スタッフ2名を新たに設け、組織全体での取り組みに向けた体制作りを行っている。</p>	○	<p>管理者のサポート体制として設置した担当職員が約1年立ち、代表、事務を含め組織の見直しや、役割の明確化をはかり、市とも連携を図りやすい体制の元、質の高いサービス提供を目指していく。</p>
10	<p>○権利擁護に関する制度の理解と活用</p> <p>管理者や職員は、地域権利擁護事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、必要な人にはそれらを活用できるよう支援している。</p> <p>全体会議等を通じホーム代表や管理者が中心となって制度の理解、重要性や必要性について話し合い、支援体制の充実に取り組んでいるが、現段階においては関係する職員のみが情報を持っている状態であり、情報伝達や迅速な対応を求められるときの不安を感じる事がある。</p>	○	<p>今後は、全体会議の年間計画の中にスタッフが自ら立案できる研修会の企画等もふまえ、自分たちが必要と思う事への知識を身につける機会を設けていく。またその際には地域包括支援センターの協力を仰ぎ、勉強会等を通じて実際に地域では、どのような場合に活用されているか等、より現実的な視点での理解を深めていく。</p>
11	<p>○虐待の防止の徹底</p> <p>管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内で虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。</p> <p>今年度においては虐待防止に関する研修会の参加、また事業所においての話し合いなどはもたれていないが、開設時より入居者の支援をしていく上でいかに虐待というものが不適切であるかという事を日常的に話し合う機会があり、それは最初から変わっていない。</p>	○	<p>制度上においての虐待の観点や、権利擁護等、知識として不足している部分を新たに研修会等の活用や、管理者やスタッフが調べていく。又、新たなマニュアルの作成も検討していく。</p>
4. 理念を実践するための体制			
12	<p>○契約に関する説明と納得</p> <p>契約を結んだり解約をする際は、利用者や家族等の不安、疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。</p> <p>契約時には理解していただけるまで説明させて頂き、また疑問に思われる事や、改善点を教えていただく事もある。互いにより関係を作り上げていくという意識を持ち契約にあたっている。</p>	○	<p>契約時のみではなく、担当するスタッフは初期の関係作りの必要性と、金銭が発生するための責任感と正確性を今以上に身につけていかなくてはならない。管理者や事務員を含めて契約書を熟読し、信頼していただける自分作りをしていく。</p>

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んでい きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
13 ○運営に関する利用者意見の反映 利用者が意見、不満、苦情を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	苦情担当窓口はあるものの、スタッフに周知されているとはいえない状態である。苦情としてあがるものに対する対処になっている。	○	スタッフが入居者及び家族の不安や、言いたくてもいえないことを汲み取り、苦情としてあげていくということを平成20年度1月の全体会議の中で苦情担当窓口から全スタッフに伝え、取り組んでいる。また、運営推進会議の中でも伝えていくようにする。
14 ○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている。	通院後には、必ず家族に電話連絡を行い、受診結果等について報告を行っている。また面会時等日常的に入居者の暮らしぶりや身体の状態変化の有無についても説明、報告を行い、その都度、相談、意向の確認を行っている。	○	ノロウイルスの感染を受け、今まで行っていた報告の甘さを痛感する。日頃からの関係性を築く上で、何よりも家族の大切さをスタッフが意識し、信頼していただけるように努める。
15 ○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情等を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	入居の契約時には、第三者相談機関について連絡方法等の説明を行っている。又、玄関に苦情ボックスを設置する他、常にケアの見直しを行い、表面化していない段階からの改善を心掛けている。	○	スタッフが入居者及び家族の不安や、言いたくてもいえないことを汲み取り、苦情としてあげていくということを平成20年度1月の全体会議の中で苦情担当窓口から全スタッフに伝え、取り組んでいる。また、運営推進会議の中でも伝えていくようにする。併せて、家族会の発足も検討していく。
16 ○運営に関する職員意見の反映 運営者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	日常的に双方向での話をし、それをくみ上げるようになってきたが、管理者から代表に上げる段階で躊躇することもあり、適切に反映しているとはいえないこともある。	○	管理者の資質として求められる事であり、代表に対しても意見を通さなくてはならない部分である。スタッフが信頼し、互いに風通しのよい環境作りに取り組んでゆく。
17 ○柔軟な対応に向けた勤務調整 利用者や家族の状況の変化、要望に柔軟な対応ができるよう、必要な時間帯に職員を確保する為の話し合いや勤務の調整に努めている。	スタッフ間で状況について十分に話し合い、必要に合わせて勤務調整等を行っている。		
18 ○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている。	年間を通しての離職者が減り、安定した状態にある。	○	職員が固定され、ユニット間の連携が図りづらい面もある。ホームとしてユニットに関係なく行き来できるようになれば、互いの活性化にもつながり入居者の支援の幅も増えるという事を意識していく。その為に報告、連絡、相談を随時適切に行うようにする。

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んで きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
5. 人材の育成と支援			
19	<p>○職員を育てる取り組み</p> <p>運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。</p>	<p>ホーム代表自身がスーパーバイザーとして、全体会議等を通じケア向上に向けた育成を行うとともに、スタッフ個々に合わせ、本人の意向も確認した上で各研修会や講習会等への参加の場を積極的に設ける等、組織的な取り組みも行っている。</p>	<p>○</p> <p>今までは研修会に参加し、個人のスキルアップは図れたが、それを事業所の中で生かすという活動がされていなかった。研修報告を書面的のみならず、全スタッフに還元できるように全体会議等での発表の場を設ける等検討していく。</p>
20	<p>○同業者との交流を通じた向上</p> <p>運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワーク作りや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。</p>	<p>3市3町村による広域連絡会を発足し、事例検討会等意見交流の場を積極的に設けている。</p>	<p>○</p> <p>今後は事業所単位でのネットワーク作りに留まらず、介護従事者個々が、より自由に意見交換や相談を行えるようなネットワーク作りを行っていく。新人スタッフ対象の研修会、認知症サポーター養成講座開催に関する勉強会等の活動の充実を図っていく。また、市内のグループホームとの連携の必要性を感じ、地域包括支援センターも含めての集まりを開始している。</p>
21	<p>○職員のストレス軽減に向けた取り組み</p> <p>運営者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。</p>	<p>ストレスに感じる事は個々人が違い、それをすべて把握している状況ではない。</p>	<p>○</p> <p>何に対してストレスを感じているのか日常的に話し合う機会はあるが、それを具体的に解消していく取り組みはなされていなかった。スタッフは管理者に、管理者は代表に相談できる信頼関係を築くところから取り組んでいく。</p>
22	<p>○向上心をもって働き続けるための取り組み</p> <p>運営者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、各自が向上心をもって働けるように努めている。</p>	<p>目標の設置を求めるのではなく、チームとしてそれぞれが取り組みたい事を確認し合い、互いにサポートしていく様に心がけている。</p>	
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援			
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応			
23	<p>○初期に築く本人との信頼関係</p> <p>相談から利用に至るまでに本人が困っていること、不安なこと、求めていること等を本人自身からよく聴く機会をつくり、受け止める努力をしている。</p>	<p>まずはじっくりと本人の話を聴く事を第一と考え、その中で気付いた事や感じた事等は必ず他のスタッフに伝え、その都度課題や可能性等について話し合っている。そうした情報の収集、蓄積、及び共有をスタッフ全員が徹底して行う事が利用者との関係作りの基盤になると考え、初期に限らず継続して行っている。</p>	<p>○</p> <p>常に本人の視点に近づけるよう努めていく事が大切であると考え、利用者本人の日常的な言動や表情等に対して、今後も気付ける自分作り、見直しを行っていく。</p>
24	<p>○初期に築く家族との信頼関係</p> <p>相談から利用に至るまでに家族等が困っていること、不安なこと、求めていること等をよく聴く機会をつくり、受け止める努力をしている。</p>	<p>入居される以前より入居される方、家族と面談し、現在の状況や困っている事、利用した後の生活像など不安に感じる事を担当スタッフが確認し、それを代表、管理者、スタッフと共に話し合い煩わしい面を減らすように努めている。</p>	

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んで きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
25 ○初期対応の見極めと支援 相談を受けたときに、本人と家族が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	相談に対してはスタッフ間で十分に検討し、まずは本人、及び家族の心理面(不安感や焦燥感等)の把握に努める一方で、状況、段階に合わせた最適なサービスの提供に向け対応を行っている。		
26 ○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している。	入居希望時及び入居前には本人や家族の要望や状況等を面談等を通じ、じっくりと確認し、ホーム内各所の工夫等を含めた支援の理念、具体的な内容についても納得、安心して頂けるよう説明を行っている。	○	本人や家族に安心して頂けるよう、入居後はより積極的に意見交換、意向確認を行っていく。
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援			
27 ○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている。	入居者一人一人に対して全スタッフが誠意ある関わり方を常に意識し、「～してあげる」ケアではなく、「共に～していく」ケアを心掛けている。スタッフの頭の中にあるケアではなく、入居者と共に作り上げていくケアを目指し、日々努めている。	○	支援が必要な場面においては、まずは本人の意思を十分に確認し、本人に選択、決定して頂く事が「心の自立」に繋がると考え、今後も誠意ある関わり方を心掛けながら取り組んでいく。
28 ○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽を共にし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	家族との距離を感じる事もあり、互いに遠慮しているように思われる。状況報告しか行っていない家族もあり、すべての家族との同じ方向を向いているとはいえない。	○	ノロウイルスの発症を受けて、家族の思いや、アウルに対して思っている事をわずかではあるが、言って頂けた。自分たちの姿勢を見ていただいた上で再度、信頼関係を築けるように蜜に連絡を取り、相談し、互いに支えあっていく。
29 ○本人と家族のよりよい関係に向けた支援 これまでの本人と家族との関係の理解に努め、よりよい関係が築いていけるように支援している。	家族が面会に来てはじめて知ることもあり、家族と本人の思いにずれが生じる事があるために、双方に戸惑いが生じる事もある。	○	自分達は日常共に過ごしているために緩やかな変化に感じるかもしれないが、家族にとっては不安な事や、少しの変化ではない事があるという事を念頭に置き、家族側の視点に立ち関係を保つように支援していく。
30 ○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	家族の協力を得ながら墓参りや外泊等、関係の継続、向上に向けた支援を積極的に行っている。	○	今後も本人及び家族の意向に添った支援に向けて、家族の協力や理解を得ながら積極的に行っていく。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んでい きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
31	○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるように努めている。	日常的にスタッフ間で共同生活の意義や目的等について話し合い、その都度支援についての検討、見直しを行っている。	○	一方的な介助者の視点に捉われないよう今後も入居者一人一人の生活について、できる限り幅広い視点から検討及び見直しを行い、関係向上に努めていく。
32	○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、継続的な関わりを必要とする利用者や家族には、関係を断ち切らないつきあいを大切にしている。	退所後も葉書や電話等で定期的を取り合う等、関係は良好であると考えている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント				
1. 一人ひとりの把握				
33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	日々の入居者との関わりにおいては、スタッフ自身がその意向や希望について固定観念を持たぬよう、断定せずに継続して把握に努めている。	○	スタッフ自身の視点や発想がワンパターンになってしまったり、断片的な理解に留まり、対応のみのケアにならぬようスタッフ間での積極的な話し合いを今後も行っていく。
34	○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	独自のライフストーリーや、センター方式を元に本人の生活像を捉え、切り離された生活にならないように支援している。		
35	○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状を総合的に把握するように努めている。	アセスメントシートの活用等を行い、ユニット会議や日常的な話し合いを通じ、現状の把握に努めている。	○	現状における課題に対するアプローチがやや消極的な場面(外出等)がある為、今後は入居者の負担にならないよう充分に配慮した上で、課題解決に向けた働きかけを行っていく。
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し				
36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、介護支援専門員の適切な監理のもとに、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している。	面会や電話連絡時等を利用し家族に対して、本人の現状をしっかりと伝えた上で、介護計画への意見や希望等を確認しているが、充分ではないと考えている。	○	今後も継続して、家族との意見交換や意向確認等を積極的に行い、より入居者本位の介護計画作成及び実施に向け取り組んでいく。

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んで きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
37 ○現状に即した介護計画の見直し  介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、介護支援専門員の適切な監理のもとに、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している。	現在は1ヶ月毎に介護計画の見直しを行い、また入退院等により状態に変化があった場合についても随時見直し及び検討を行い、介護計画を作成している。	○	入居者によっては、1ヶ月毎の見直しでは対応に遅れがみられる場面もある為、今後は変化、課題等を明確にした上で、その都度介護計画の修正や補足等を行っていく。
38 ○個別の記録と実践への反映  日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	アセスメントシートの記録の徹底、内容の充実及び活用を常にスタッフ一人一人が心掛け、加えて口頭での情報交換も徹底して行っている。		
3. 多機能性を活かした柔軟な支援			
39 ○事業所の多機能性を活かした支援  本人や家族の状況、その時々々の要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている。	身体面の変化により、これまで行っていたドライブ等、入居者全員での外出が難しくなってきた為、駐車スペースに休憩場所を設置し、日向ぼっこをする等できる限り生活の幅を確保できるよう、工夫しながら取り組んでいる。	○	今後も事業所の特性を活用する等、柔軟な支援に向けた話し合いを家族や地域も交えて積極的に行っていく。
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働			
40 ○地域資源との協働  本人の意向や必要性に応じて、民生委員やボランティア、警察、消防、文化・教育機関等と協力しながら支援している。	舞踊や演奏会等の地域のボランティア団体への協力依頼や受け入れを積極的に行っている。また近隣の小中学校の見学等の受け入れも行っている。	○	各ボランティアについては、年4～5回の家族会の中での訪問が多い為、今後は家族会に留まらず誕生会や敬老の日等、日常的な受け入れを行っていく。
41 ○他のサービスの活用支援  本人の意向や必要性に応じて、地域の他のケアマネジャーやサービス事業者と話し合い、他のサービスを利用する為の支援をしている。	現在は、出張理容サービスを一部の入居者が利用されている。	○	今後も入居者の意向及び希望に添えるよう、更に検討していく。
42 ○地域包括支援センターとの協働  本人の意向や必要性に応じて、権利擁護や総合的かつ長期的なケアマネジメント等について、地域包括支援センターと協働している。	主に電話連絡により、入居希望者の状況等の情報交換を行っている。また地域包括支援センター主催の事例検討会にも積極的に参加し、意見交換を行っている。	○	より充実した協働体制の構築に向け、各事業所間でのネットワーク作りや、共同での認知症サポーター養成講座の開催に向けた取り組み(包括支援センター主催の講座に講師として協力)を積極的に行っている。



項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んで きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
43 ○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	本人が馴染みのある医療機関への受診を基本とし、状況の変化に応じて訪問診療の利用を検討し、家族、医療機関と相談しながら、今必要な医療を受けられる体制を構築している。		
44 ○認知症の専門医等の受診支援 専門医等認知症に詳しい医師と関係を築きながら、職員が相談したり、利用者が認知症に関する診断や治療を受けられるよう支援している。	医療機関の認知症に対する理解が増し、状況の相談や服薬の調整などでのやり取りがスムーズになってきている。	○	医療機関のみではなくスタッフの報告する力が増す事で、より適切な関係を築いていけると感じる。その為にホームに勤務する看護師や、訪問看護ステーションとの連携を今以上に強めていく事で、個々の医学的視点や報告しなくてはいけない事などを適切に伝えていけるようになる。その事が医療機関と介護職の連携に繋がるので、取り組んでいく。
45 ○看護職との協働 事業所として看護職員を確保している又は、利用者をよく知る看護職あるいは地域の看護職と気軽に相談しながら、日常の健康管理や医療活用の支援をしている。	ホームに勤務する看護師を中心とし、訪問看護ステーションとの連携を図り、日々の健康管理に努めている。	○	ユニットの垣根を作らず、医療知識の豊富な看護師に相談するという体制を作る事で、より健康管理に努めていく事ができると感じている。全入居者の健康状況を報告し、指示を仰いでいく。また、訪問看護ステーションに研修会等の依頼も検討していく。
46 ○早期退院に向けた医療機関との協働 利用者が入院した時に安心して過ごせるよう、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて連携している。	担当医師より経過報告等がある際には、必ずスタッフも同席させて頂き、医師や家族の意見を直接確認している。又、今後の課題や注意点等を家族と一緒に確認し、家族の不安解消に努めると共に、その後の早期退院、退院後の受け入れ体制の準備に向けた迅速な対応にも繋げている。		
47 ○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している。	重度化してからの方針や希望を、本人を含め家族と決めていとはいえない。	○	家族の思いだけでなく、本人の意思を今言える状態のうちに確認し、その事を看護師を含めたスタッフ、かかりつけ医と相談していく。
48 ○重度化や終末期に向けたチームでの支援 重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、事業所の「できること・できないこと」を見極め、かかりつけ医とともにチームとしての支援に取り組んでいる。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	終末期に対するスタッフ間の意識が統一されていない事や、どの段階から医療を要するかなど、年数の経過と共に下降している体調を支える為の知識、技術をより身につけていかななくてはならないと痛感している。	○	家族も含めて本人の望む終末というものをあらためて話し合う必要がある。その上で、信頼の置ける医療機関との連携、ホームの力を再確認し、足りないもの、補えるものをその人にあった形で支援していける体制を作っていく。全スタッフが互いを信頼し、協力していく事から始めていく。

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んでい きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
<p>○住替え時の協働によるダメージの防止</p> <p>49 本人が自宅やグループホームから別の居宅へ移り住む際、家族及び本人に関わるケア関係者間で十分な話し合いや情報交換を行い、住替えによるダメージを防ぐことに努めている。</p>	<p>リロケーションダメージによる生活の不自由さをスタッフが理解したうえで、必要な情報を家族や関係機関を通じて収集し、スタッフ間で話し合い対応している。</p>	○	<p>入居時には検討しているが、退居時におけるリロケーションダメージを検討してこなかった。自宅等に移り変わる時の事を予め想定し、事前に関係機関と道筋を話し合っていく。</p>
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援			
1. その人らしい暮らしの支援			
(1)一人ひとりの尊重			
<p>○プライバシーの確保の徹底</p> <p>50 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取扱いをしていない。</p>	<p>入居者一人一人に対しては、常に敬意を払い、本人の心情等に配慮したケアを心掛けている。また個人情報に関しては、スタッフ全員がプライバシー保護の重要性を理解し、徹底した管理を行っている。</p>	○	<p>声かけや対応については、今後もスタッフ同士がお互いのケアについて日常的に見直しを行い、検討、意見交換を行う等してケア向上に努めていく。</p>
<p>○利用者の希望の表出や自己決定の支援</p> <p>51 本人が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかる力に合わせた説明を行い、自分で決めたり納得しながら暮らせるように支援をしている。</p>	<p>まずは、日常生活での信頼関係の構築、充実が重要であると考え、誠意ある関わりを心掛けている。そうした生活の積み重ねの中で、「この方だったら、こう感じるのでは？」等 入居者一人一人の性格や価値観等の個性を自然な形で理解、尊重し、支援に繋げていけるよう努めている。</p>	○	<p>今後も、入居者一人一人が心から信頼できる誠意あるケアを目指し、常に自分自身を見直しながら、ケア向上に努めていきたいと考えている。</p>
<p>○日々のその人らしい暮らし</p> <p>52 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。</p>	<p>日常的に、スタッフ同士がケアの見直しや検討等を積極的に行い、ケアの向上や改善に努めている。</p>	○	<p>食事や就寝時間等の根拠や意義等の確認をしないまま習慣化している場面もみられる為、今後は再度支援の根拠や目的等をスタッフ間で検証し、支援の向上に繋げていく。</p>
(2)その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援			
<p>○身だしなみやおしゃれの支援</p> <p>53 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援し、理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。</p>	<p>家族と連携を図り、入居者個々の生活暦等から本人の好み等の把握に努めている。また更衣の際には入居者と相談しながら洋服と一緒に選ぶ等の支援を行っている。</p>		
<p>○食事を楽しむことのできる支援</p> <p>54 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員がその人に合わせて、一緒に準備や食事、片付けをしている。</p>	<p>出されるものが当たり前という関係に入居者、スタッフ双方が考えていると思う。食事に至るプロセスが入居者主体とはいえない。</p>	○	<p>食事を楽しむ過程として、食欲がわく(想像する)、食べるためにどうするかを考える、行動する、獲得し団欒するというプロセスの見直しを図っていく。その為に日頃のアセスメントの視点を食事ではなく、生活を意識するという事から話し合っていく。</p>

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んで きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
55	○本人の嗜好の支援 本人が望むお酒、飲み物、おやつ、タバコ等、好みのものを一人ひとりの状況に合わせて日常的に楽しめるよう支援している。	入居者本人や家族と相談しながら支援している。		
56	○気持ちよい排泄の支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして気持ちよく排泄できるよう支援している。	アセスメントシートの活用、積極的にカンファレンスを実施する等して、現状の把握に努めると共に、今後の課題や可能性についても、随時話し合いを行っている。	○	服薬にたよる場面が増えてきているが、日常生活の見直しや、生活をするということ意識して取り組まなくてはいけないと感じる。食事や運動と一緒に排泄だけを切り離さず、総合的に支援していく事が自然な排泄に繋がる事を一人一人意識して支援していく。
57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している。	勤務の見直しや変更等行いながら、入居者一人一人の意向に添った支援が行えるよう取り組んでいる。	○	入浴間隔があく方へのアプローチをチームとして考えていく事が必要である。入浴したい状況を考える事や、この人だったら入りたいと思われる自分作りも必要であると感じる。入浴しているときの安らぎや楽しみ、快感という当たり前の感情へのスタッフ個々の意識を高めていくように、話し合っていく。
58	○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、安心して気持ちよく休息したり眠れるよう支援している。	不眠時や疲労時には安易に入眠、休息を促すだけではなく、まずは入居者の生活全体(一日の運動量や心理状態、身体面の変化等)を分析及び検討し、「安心できる環境作り」に向けた取り組みを行っている。入居者一人一人の生活を断片的に切り取った見方や支援は避け、対応のみに留まらぬよう心掛けている。		
(3)その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援				
59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている。	日常的な会話等のコミュニケーションを通じ、入居者一人一人の意向に添った支援を行えるよう希望等の確認を行い、その都度、スタッフ全員で話し合い、共通認識の下で精神的、身体的な負担にならぬよう心掛けながら、支援に当たっている。	○	現在、「対スタッフ、他の入居者や家族等に限定された中での生活は、本人にとって有意義といえるのか？」等、生活の枠の拡大(主に地域との日常的な交流等)が課題となっている為、今後も十分に検討し、支援の向上に努めていく。
60	○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	入居時に所持金の管理についての取り決めを家族と決めていたが、状況に応じて家族と相談し、本人がお金の重要性について取り戻せるように支援している。		

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んで きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさず、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している。	歩行に不安がある方に対しては、駐車場に休憩場所を設置する等し、気軽に安心して参加して頂ける支援を行い、また町内会とも積極的に連携を図り、年間を通じ収穫祭やクリスマスパーティー等の行事への参加も行っている。	○	町内会行事への参加は近隣住民の積極的なサポート等により、入居者も非常に喜ばれていた為今後も継続して行っていく。
62	○普段行けない場所への外出支援 一人ひとりが行ってみたい普段は行けないところに、個別あるいは他の利用者や家族とともに出かけられる機会をつくり、支援している。	お墓参りや法事や家族との温泉旅行や年末年始の帰宅等、家族と積極的に家族と連携を図りながら、積極的に支援している。	○	今後も家族と協力しながら、支援の拡大及び充実に向け積極的に取り組んでいく。
63	○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	日常的に支援を行っている。	○	入居者からの連絡を今以上に支援していく。手紙をやり取りする事や家族に連絡する事を、本人の希望を汲み取り家族と相談し支援していく。
64	○家族や馴染みの人の訪問支援 家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪問でき、居心地よく過ごせるよう工夫している。	電話や毎月の通信等を通じて、入居者の暮らしぶりや意向等今の様子を伝える事により、いつでも安心して訪問できる環境作りを積極的に行っている。		
(4) 安心と安全を支える支援				
65	○身体拘束をしないケアの実践 運営者及び全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	全体会議や日常的なスタッフ間での話し合いを通じ、入居者一人一人の人間性や個性を尊重したケアの追求が徹底して意識付けられている為、その結果として身体拘束は一切行っていない。また新人スタッフに対しては、まず「人としてどうあるべきか？」等の介護方法のみに捉われない教育を一貫して行い、規則としての身体拘束防止ではなく、自らが理解し判断していける意識作りを本人と一緒にしている。		
66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる。	利用者の行動を問題視するのではなく、その行動の基となる根拠や要因、意向を追究し理解することが我々専門職の使命であるという理念を常に自覚し、ケアに努めている。防犯上の観点から夜間の玄関の施錠及びボイラー室の施錠を除き、一切行っていない。	○	今後も施錠と同等の行動の抑制や自由の制限がないか、声がけや誘導等のケアの見直しを積極的に引き続き行っていく。

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んでい きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
67 ○利用者の安全確認 職員は、プライバシーに配慮しながら、昼夜通して利用者の所在や様子を把握し、安全に配慮している。	所在等の確認はそれぞれ声を掛け合い行ってきたが、変化する心身の状態の把握を共有できていたとは言いがたい。	○	入居者の僅かな心身の変化等によっても、留意すべき点の変動する為、今後も入居者一人一人のその日、その時の変化を見逃さぬよう確認等に努めると共に、予測される点等より具体的な内容での協議を行っていく。
68 ○注意の必要な物品の保管・管理 注意の必要な物品を一律になくすのではなく、一人ひとりの状態に応じて、危険を防ぐ取り組みをしている。	そこにある物を無くすのではなく、スタッフの配慮を届ける事で安全を確保している。	○	衛生面においてのスタッフの配慮が足りず、入居者に迷惑をかけることがあった。直接的な安全のみではなく、感染症や衛生面の重要性をあらためてスタッフ全員で話し合った。
69 ○事故防止のための取り組み 転倒、窒息、誤薬、行方不明、火災等を防ぐ為の知識を学び、一人ひとりの状態に応じた事故防止に取り組んでいる。	事故報告書が形骸化されたものとなり、それを受けての具体的な対策を残さず、その場限りの対応となっている。また、ヒヤリハットに関しても個々に思うことが違うということが前提となり、甘く見ていた。	○	ノロウイルス感染を受け、全スタッフで話し合い、様々な要因について個々に意見を出す場ができ、それを全員で共有する事ができた。今後は、記録をする事ではなく対策を講じることに意義があるという事を今以上に意識して、全員で共有できるように話し合いを重ねていく。
70 ○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備え、全ての職員が応急手当や初期対応の訓練を定期的に行っている。	救急救命講習や、AEDの使用方の講習は受けているが、実際の状況に応じた判断という部分において、不安を感じているスタッフもいる。	○	日常における健康状態の把握に努め、細やかな配慮を元に状態を観察する力を養っていく。その為に看護師や医療機関の指示を仰ぐ癖を身につけ、単独で判断してはならない状況を少なくするように支援にあたる。
71 ○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている。	定期的(年2~3回)に日中、夜間を想定した火災避難訓練を実施し、その都度消防署や立会人(運営推進会議メンバー、防災設備の業者等)から指示やアドバイスを頂く等して、対策の充実に繋げている。	○	地震や火災等の有事の際(特に夜間帯)には、近隣住民の協力が不可欠であると考え、今後は避難訓練への参加を呼びかけたり、訓練結果について回覧板等を通じて報告を行う等しながら地域の理解や協力を求めていく。
72 ○リスク対応に関する家族との話し合い 一人ひとりに起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	入居時において生活していくうえで様々な出来事があり、安全に配慮した中で可能な限り本人の選択を尊重していくことを伝え、家族とも状態の変化に伴い相談している。	○	状況の変化のみではなく、本人のしたい事、様子を汲み取り家族に伝えその都度相談していける関係を築いていく。
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援			

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んで きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
73 ○体調変化の早期発見と対応 一人ひとりの体調の変化や異変の発見に努め、気づいた際には速やかに情報を共有し、対応に結び付けている。	毎日の暮らしの中での入居者一人一人の僅かな体調の変化(食欲の変化、歩行状態や顔色等)に気付けるように日頃よりスタッフ間で現状の確認を行い、変化があった場合には直ちに医療機関に連絡を行い、早期発見、治療に繋げている。	○	入居者の加齢に伴いより早期での発見、対応が必要であると考え、今後はスタッフ間、もしくは医療機関と連携して勉強会を行う等しながらスタッフ個々の医療の視点での観察力、判断力の向上に努めていく。またこの積み重ねが、結果的に終末期及び看取りへの支援体制の充実化にも繋がっていくと考えている。
74 ○服薬支援 職員は、一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	処方箋を日々の様子を記載できるファイルに添付していたが、全スタッフに目的が周知されず、形だけのものとなっていた。	○	日頃の状態を把握していく上で、副作用の可能性を考えるために添付しているものという事を再度周知し、個々の状態を確認していく事を話し合った。
75 ○便秘の予防と対応 職員は、便秘の原因や及ぼす影響を理解し、予防と対応のための飲食物の工夫や身体を動かす働きかけに取り組んでいる。	訪問看護ステーションや主治医等の医療機関と連携を図り、その都度相談し、指示やアドバイス等を受けながら、支援の改善及び向上に繋げている。また便秘の影響については、専門書や各研修会等の情報をスタッフ間で共有する等し、理解に努めている。	○	生活における排泄を意識し、服薬だけに頼ることなく支援していく事を、看護師や医療機関を含め話し合っていく。また、排便困難な状況によって起こる不快感を理解するために看護師を中心とし勉強会を開催していく。
76 ○口腔内の清潔保持 口の中の汚れやにおいが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や力に応じた支援をしている。	専門医等の協力を得ながら勉強会、講習会等を通じてスタッフ一人一人が適切な口腔ケアの理解に努めている。	○	まだまだ衛生に対する認識が充分とはいえない為、今後も専門医や保健師等に指導を仰ぎ、現行の支援方法に改善すべき点や注意すべき点がないか等積極的に意見を求めていく。
77 ○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	アセスメントシートや水分摂取チェックシートの記入の徹底や活用により、入居者一人一人の好みや習慣を含めた現状の把握や理解に努めている。また支援内容の見直しや検討の際には、体調面は勿論の事、食事に対する喜びを損ねない事を重点において話し合っている。	○	今後も入居者一人一人の意向に添った支援を心掛け、「飲ませる」「食べさせる」ケアではなく、生活の中で共に喜びを感じながらさり気なく、且つ適切に働きかけを行えるよう努めていく。
78 ○感染症予防 感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、実行している(インフルエンザ、疥癬、肝炎、MRSA、ノロウイルス等)	形骸化された感染症予防マニュアルや医療的視点の甘さもあったが、何よりもスタッフの認識の甘さ、チームとしての連携、意思疎通の不備によりノロウイルスの発症、感染拡大に繋がってしまった。	○	内部職員による感染症対策委員会の発足、開催を期に、衛生面での徹底、感染症に対する知識を見につけ、独自のチェックリストを作成し取り組んでいるが、何よりもスタッフが個々に自分達の意識を改善し、互いに意見を交換できるチーム作りに取り組んでいる最中である。

項目		取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んでいきたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
79	○食材の管理 食中毒の予防のために、生活の場としての台所、調理用具等の衛生管理を行い、新鮮で安全な食材の使用と管理に努めている。	まな板や布巾については、煮沸等により殺菌を行っている。また調理の際には、まな板を肉、魚用と野菜用に分ける等行い、食材の保存に関しては、購入日別に2台の冷蔵庫に分ける等の工夫を行っている。その他にも台所付近に食中毒に関するマニュアルを添付し、常に正しい知識、方法を確認できるようになっている。	○	食材の管理方法など、ノロウイルスの発生を期に見直し、大量購入ではなく本来グループホームでの買い物目的を話し合い、入居者と共に生活をする事を意識し、買い物と一緒に出かけることが安全管理に繋がるという事を話し合っていく。
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり				
(1)居心地のよい環境づくり				
80	○安心して出入りできる玄関まわりの工夫 利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、安心して出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	シロ(犬)の小屋周辺の環境が整備されず、スロープ付近の花や花壇が生かされていない。	○	シロ(犬)も含めての生活環境であることを一人一人が認識し、環境を整えていく事を話し合っていく。糞の処理やえさだけではなく、シロ自身に対しても考えていく。
81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	館内の壁に庭で撮った草木や入居者のドライブ等の外出先での写真、入居者の俳句や絵日記を飾る等、入居者にとって身近に感じられる雰囲気作りを心掛けている。しかし、環境整備の面からは清掃が行き届いていない面も多々ある為に不快な状況にあった。	○	清掃するという事を目的とするのではなく、共に生活していくという事を念頭におき、入居者の暮らしやすい生活環境を一緒に考えていく。
82	○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中には、一人になれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	リビング(共用スペース)から取って死角となる位置に、囲炉裏の間や談話スペースを設ける等の工夫を行っている。		
83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使いなれたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	入居の際には家族の理解や協力により、筆筒や椅子等の家具類、箸や湯呑み等の日用品類等入居者が長年愛用されていた生活用品を中心に持ち込んでいる。入居後も本人より意向や希望があった際には家族に報告し、相談しながら実現に向けて支援を行っている。	○	家族が来るたびに居室の清掃を行っているのを見て、申し訳ないと感じている場面もあった。また、スタッフだけで掃除する事もあり、本人にとって居心地のよい場所であったかは疑問が残る。家族とのやり取りの中で「(スタッフは)忙しいのだからしょうがない、やれる事はやるからいってください」とのお言葉を頂くが、自分達の認識の甘さと、家族との関係性の不足が招いた結果であると痛感している。スタッフ間で話し合い、出来る事を一緒に取り組むという事を意識して行っていく。
84	○換気・空調の配慮 気になるにおいや空気のおよみがないよう換気に努め、温度調節は、外気温と大きな差がないように配慮し、利用者の状況に応じてこまめに行っている。	加湿タオル等の設置や、加湿器の設置は行ってきたが、湿度の管理という事や、空調管理は配慮が足りなかった。	○	湿度(50~60%)管理の大切さを理解する事によって、スタッフ一人一人が意識して、湿度管理、空調設備に目を向けるようになってきた。意識する事で心地よい環境を提供していく事を目指し、取り組んでいる最中である。
(2)本人の力の発揮と安全を支える環境づくり				

項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	○印 (取組んで きたい項目)	取組んでいきたい内容 (既に取組んでいることも含む)
85 ○身体機能を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの身体機能を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	握力の低下にも対応できるよう廊下に設置されている手すりに構造上の工夫(握ることも置く事も可能なタイプ)を施したり、トイレのスポットライトの設置により、夜間のトイレ通所の自立を促す等を行っている。		
86 ○わかる力を活かした環境づくり 一人ひとりのわかる力を活かして、混乱や失敗を防ぎ、自立して暮らせるように工夫している。	環境に対する取り組みに関して現段階では、チームケアの充実が重要であると考え、ユニット会議や日常的なスタッフ間での話し合い等を通じ、入居者との関わりの中でのケアの工夫や気付き等、スタッフ個々が有する情報の共有を積極的に図る事により、入居者一人一人の課題や可能性も含めた現状に対する共通認識、理解を深め、混乱や失敗の主要因となるケアのばらつきの防止、改善に繋げている。	○	個々に思っている事を伝え合い、そして認め合う事の重要性を学び、スタッフ間では様々な意見を交わすようになってきた。しかし、入居者の思いを汲み取った支援という面においては不足していると感じる。今以上に入居者の思いを自分達が表出していく事により、今いる入居者の生活が豊かになると考え、その事をスタッフが意識していく。
87 ○建物の外回りや空間の活用 建物の外回りやベランダを利用者が楽しんだり、活動できるように活かしている。	入居者と一緒に駐車場の草むしりや庭の手入れを行う等、あくまでも入居者本人の提案や希望、習慣を尊重した上でやっている。		



V. サービスの成果に関する項目		
項目	取り組みの成果	
88	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる	<ul style="list-style-type: none"> <li>① ほぼ全ての利用者</li> <li>② 利用者の2/3くらい</li> <li>③ 利用者の1/3くらい</li> <li>④ ほとんど掴んでいない</li> </ul>
89	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 毎日ある</li> <li>② 数日に1回程度ある</li> <li>③ たまにある</li> <li>④ ほとんどない</li> </ul>
90	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている	<ul style="list-style-type: none"> <li>① ほぼ全ての利用者</li> <li>② 利用者の2/3くらい</li> <li>③ 利用者の1/3くらい</li> <li>④ ほとんどいない</li> </ul>
91	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿が見られている	<ul style="list-style-type: none"> <li>① ほぼ全ての利用者</li> <li>② 利用者の2/3くらい</li> <li>③ 利用者の1/3くらい</li> <li>④ ほとんどいない</li> </ul>
92	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている	<ul style="list-style-type: none"> <li>① ほぼ全ての利用者</li> <li>② 利用者の2/3くらい</li> <li>③ 利用者の1/3くらい</li> <li>④ ほとんどいない</li> </ul>
93	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている	<ul style="list-style-type: none"> <li>① ほぼ全ての利用者</li> <li>② 利用者の2/3くらい</li> <li>③ 利用者の1/3くらい</li> <li>④ ほとんどいない</li> </ul>
94	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている	<ul style="list-style-type: none"> <li>① ほぼ全ての利用者</li> <li>② 利用者の2/3くらい</li> <li>③ 利用者の1/3くらい</li> <li>④ ほとんどいない</li> </ul>
95	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています	<ul style="list-style-type: none"> <li>① ほぼ全ての家族</li> <li>② 家族の2/3くらい</li> <li>③ 家族の1/3くらい</li> <li>④ ほとんどできていない</li> </ul>
96	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている	<ul style="list-style-type: none"> <li>① ほぼ毎日のように</li> <li>② 数日に1回程度</li> <li>③ たまに</li> <li>④ ほとんどない</li> </ul>

V. サービスの成果に関する項目	
項目	取り組みの成果
97	<p>運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている。</p> <p>①大いに増えている ②少しずつ増えている ③あまり増えていない ④全くいない</p>
98	<p>職員は、生き生きと働いている</p> <p>①ほぼ全ての職員が ②職員の2/3くらいが ③職員の1/3くらいが ④ほとんどいない</p>
99	<p>職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う</p> <p>①ほぼ全ての利用者が ②利用者の2/3くらいが ③利用者の1/3くらいが ④ほとんどいない</p>
100	<p>職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う</p> <p>①ほぼ全ての家族等が ②家族等の2/3くらいが ③家族等の1/3くらいが ④ほとんどいない</p>

【特に力を入れている点・アピールしたい点】

（日々の実践の中で事業所として力を入れて取り組んでいる点・アピールしたい点等を自由記載）

「人として、どうあるべきか？」という課題を常に自分自身に問いかけながら、未熟な自分とできる限り向き合い、僅かでも人間として成長できるよう努めていく事が介護職のみならず、我々が生きていく上で最も大切であると考えております。惜しみない優しさや思いやりを通して、その答えを教えてくれるのは、常に目の前にいる入居者であり、そうした素晴らしい方々と共に喜び、悲しみ、笑い、時には一緒にひたすら悩み、精一杯生きていく事で、少しでも恩返しができたらというのが、我々スタッフの率直な思いです。今後も介護者としての立場・視点だけに捉われず、人として多くを学び、日々のケアに活かしていきたいと考えております。